

編 集 後 記

巻頭の教育講座の小児がん診療の現状と課題については小児科を専門とする自分にとっては50数年前に始めて主治医として受け持った急性リンパ性白血病の女児の両親に「治療は難しく半年の命である」と宣告したことを思い出して隔世の感あり、ここまで小児がん医療は進歩してきたわけだが、次なるステップとして治癒後の晩期障害の克服が未開拓分野として残されており今後の課題となっていることから、小児科領域だけではない多くの研究分野の人達が連携して取り組むチーム医療が必要であることを痛感した次第です。松江市の未就学児童の園医数に関する疫学調査については、開業医として出雲地域の園医や学校医をやってきた経験から、園の規模や未就学児童数との単なる数値によるマッチングだけではなく、検診内容や医療相談件数など児童の健康増進のための学校側の要望やアンケートなども併せて実施すると共に、島根県全体の地域格差等の比較をすることによって、さらに未就学児童の検診の向上につながるのではないかと期待しております。高齢者のリハビリと低アルブミン血症との相関についての論文では、筆者も既に後期高齢者の真ただ中にあり身につまされて興味深く拝見しました。蛋白質の重要性（特に動物性蛋白）は高齢者の健康増進や運動機能維持にとって不可欠であることは最近では周知のことになっている現状です。この論文での母集団 A・B 両群の比較表 1 をみると、年齢構成で A 群 (84.5±13.6) と B 群 (79.5±13.6) と 5 歳差 (t 検定で $p<0.05$ の有意差) があるが、これについては考察では言及されていなかったことが気になる点でした。帝王切開術での抗生剤投与についてはこれまでの術後の長期投与から、2016年の抗菌薬使用ガイドラインに基づいて術前の単回投与のみにして感染症罹患率の比較をした研究ですが、やや感染頻度は高くなるとの結果でした。耐性菌や日和見感染など抗菌薬投与の是非については多々議論がありますが、筆者も小児科医の立場としてなるべく必要最小限の投与治療にとどめるべきであると考えております。今回の論文でも今後も単回投与で実践していくとの結論であり、更なる研究を進めていくことを期待したいところです。(H.S)

島根医学編集委員

浅野博雄， 貴谷 光， 児玉和夫， 大居慎治， 齋藤寛治，
 細田眞司， 小阪真二， 田邊一明， 佐藤比登美， 小林祥泰，
 椎名浩昭， 古和久典

島根医学

令和5年8月31日発行

発行者 島根県医師会

松江市末次町

編集 編集者 浅野博雄

発行所 松江市学園南2丁目3番11号
 有限会社 松陽印刷所